

令和を迎えて

西松 布咏

しばらく旅から遠ざかっていたので、平成最後の「美紗の会のつどい」を三月三十日に終えたら久しぶりに京都に行きたいと思っていた。

十数年前に京都の知人を偲ぶ会で御逢いした武田好史氏が二年前に「骨董古書かふえ・弱法師」をオーブンなされたのでいつかは三昧線と共に伺いたいと念じていたのである。その期が熟し我が美紗の会の川崎さんを仲立ちに一度きりの出逢いの糸がようやく結ばれ四月二十日に河原町の京町家での会が実現することとなった。花の都の賑わいは以前から報じられていたので桜が闇に隠れる頃にとの願いも叶い前日の宿は十二年前に泊まった「基中庵」に。

いつも一人旅の時は古くてこじんまりした宿にするが、丸山公園が開園して間もなく建った昭和初期の楚々とした佇まいには忘れられない想い出がある。今より数倍も元気だったから前日の平安神宮前の宿から三昧線と浴衣を詰めた重いバッグと共に炎天下をひたすら歩き、ようやくたどり着いた八月のその日は私だけが客。そして控えめに涼しげな笑顔で迎えて下さった私と同年代の女主人小夜さんと二人きり。階段を上がった葦簀張りの窓から蒼蒼と渡る景色が広がる二間続きの座敷も独り占め。

翌日は嵐山の渡月橋近くの料亭での浴衣会が控えていたので、そとと三昧線を弾いていると小夜さん

が「懐かしい音色を伺って亡くなった母を思い出しました」と話しかけて下さってとても嬉しかった。そんなことがきっかけで毎年の年賀状や時折の「たより」のやりとりの御付き合いが続いていた。今回の旅は加藤さんも同行となったので是非共この宿にと案内した。この日も客は私達だけでゆつくりとくつろげた。爽やかに目覚めた朝の散歩は近くの歌舞音曲の弁天様を祀る吉水神社に「今日は良い演奏が出来ますように！」と手を合わせ、迎える参拝客を厳かに待つ知恩院の広い境内を散策した。「そろそろ朝食かしら？」と宿に着くと「ご飯がもう少しで炊けますから…」と小夜さん。それならと折しも聞こえてきた鐘の音に導かれしばらく細い道を歩くと日本で三番目の大きさという鐘の音を間近に聴くことが出来た。「さくもうひとつ」の掛け声と共に三人の



青年が全身全霊で京都市中に響けとあたりの空気が震える鐘を打つ。その声に呼応するかのように驚の「ほーほけきょ」が絶妙の間合い。

まるで聲を引き立てる三昧線の爪弾きのようではないか…



宿に帰ると炊きたてのご飯に何品もの心尽くしのおばんざいが柔らかな陽射しが差し込む小さな部屋に準備されていた。加藤さんはお椀を一口飲んだとたんに「こんなにおいしいお味噌汁を飲んだの初めて！」と感涙にむせんだほど。かくして夢のような春の刻がゆつくりと過ぎていった。おいとまの玄関の壁にかかっていた「芸立つることの難しと衣替え・芳翠」の短冊が目にと止まった。聞くところによると主の小夜さんの故郷・土佐で山内家の代々の典医を努めた家柄の医者でありながら仕舞や鼓を究め高浜虚子主宰のほととぎすの同人であられた叔父の書であるとのこと。年月を重ねるごとに芸で身を立てる

ことの難しさを感じている私にとってまさしく同感の一句で思わずシャッターを切ってしまった。小夜さんも独りで由緒ある宿をいつまで維持してゆけるかとの難しい現状を漏らしていらした。変わらぬ想いを持ちながらも容赦ない年月の流れにたゆたうお互いの立場を気遣いながら又の再会を期して宿を後にした。

重いキャリングケースを引きながら人里離れた山頂から八坂神社へとまさに天上から下界においてゆく芸人になり、人混みをかき分けて東おどりの南座前でタクシーに乗り会場となる「弱法師」へと向かう。今回主催して下さった武田好史氏ともやはり十数年前に一度御逢いしただけに、いつか京都で：のお互いの想いの糸が結ばれ終始心温まる秘会を開催して下さった。

かくして久しぶりの京都はまさしく平成を締めくくる想い出深い旅となった。

近頃盛んに外人や若者が京都を訪れ千年の都が新しく変貌してゆく様を見聞きしていたので新幹線が通った金沢と同じように私の昔の京都の記憶が崩れてゆくような気がして意識して遠ざかっていた。しかしながら今回の旅は、変えてはいけないこと、変わらなければならぬこと、を日々考えながら生きて来た私にとつて新たに、次世代に大切に残したいことは何か？を問いかけられたような気がする。

新しい年号の令和は、千二百年前に作られた万葉集の「初春令月・氣淑風和」から引用され人々が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つという意味が込められていると首相はもっともらしく説明されたが今こそこの想いを新たにしてくかねばならないと思う。

付かず離れずのさりげないおもてなしをして下さった基中庵でのひととき。

新緑を縫って差し込む朝陽を浴びながら心を合せて日本中に響けとばかりに鐘を撞いていた若者の力強い掛け声。その間をさりげなく呼応するかのような驚のさえずり。令和を迎えても弟子と共に変わらぬ道を歩み続けようと誓う私の心にいつまでも甦してゆくような気がする。

何かのご縁

川畑 雅一

「まさか小唄の世界に：」。私が小唄を稽古する事になるとは、少し前まで全く想像もしない出来事でした。

仕事は、テレビ番組のプロデューサー。「チョコちゃん」をつくっている会社に勤めています。昼夜問わず、あちらこちらに飛び回る生活が始まって彼れ此れ三十年以上。湾岸戦争後すぐにイラクに乗り込んだり、アルペンスキートの五輪選手を追いかけて真冬のアルプスに挑んだり、その一方で、政治家や経済人を追って日本各地取材したりと、記者として、ディレクターとして、まさにテレビ屋としての人生を走り続けてきました。プロデューサーとなつてからも、そ



の生活は相も変わらず。歳を重ねるにつれ、本来少くなるはずの仕事は年々増え続け、日々時間に追われて過ごしています。現職になつてからは人生の勉強のため、時間をひねり出しては仕事以外の様々な分野の方々に会い、お話を聞かせて頂くような心がけ、時間との格闘はさらに激しさを増しています。そんな生活のなか、友人達との会食の場で布衣先生とお会いさせて頂きました。

初対面の先生は、にこやかな笑顔で気さくに話かけて下さり、日本文化の話や邦楽の話など、友人たちと共に大いに盛り上がりました。私が以前にお茶を習っていたことや、その場で最年少だったことなどもあり、いつの間にか「美紗の会のついで」と「お稽古」を見学させて頂く流れが出来上がっていききました。最初に伺ったのはかたせ梨乃（典咏）さんと川崎さんの美紗の会に向けての合わせ稽古の日。その場合は、先生の優しい声ながら厳しい指導の姿。

凛とした空気が張り詰めており、自分とはまったく無縁の世界だと、あまりに普段の生活とかけ離れた状況に戸惑いながらも、興味津々でお稽古の成り行きを見守っていました。終了後、お二人にお話を伺うと、我が社との深い繋がりや共通の知人がいたり、色々な縁があることにびっくり。「うん？意外と縁が深いのかな」と少し不思議な気持ちを持ちました。

そして、いよいよ赤坂での「美紗の会のついで」への参加です。当日は、群馬での仕事を途中で切り上げ、とんぼ帰りで会場に向かうスケジュール。演目が押していたこともあって、思っていた以上に皆様の演奏に接する事が出来ました。何曲か聴かせて頂くなか、美紗の会の皆様の唄や三味線に対する真剣さ、また会の持つ温かい世界に触れる事ができ、「縁がくつきりと見え始めていた」気がしています。

そして続く宴の席で自身の突然の紹介に戸惑うなか、皆さまの温かい拍手の後押しで「これも縁かな。」と、入門の決意を固める事となりました。

いま思えば、ただでさえ時間に追われて仕事している自分が、小唄のお稽古を始めることになるうとは、まったく想像しておらず。予想だにしない展開に私自身が一番驚いています。後でわかったことですが、司会の川崎さんがテレビ局のADさんながら、私の背後で手を大きく回して会場を盛り上げていたとの事。職場で普段使っている手法を自身が受けていたのかと思うとちょっと悔しい気持ちにさせられます(笑)。

しかしながら、いま自分のおかれた毎日の生活を考えると、こんな機会に遭遇しない限り、生涯に渡って小唄入門に至ることはなかったでしょう。また日本文化の継承の観点から、その一つの世界に身を置けるということは、人生の上でも、貴重な経験になると思っています。ですから「小唄の世界、美紗の会の皆様と、何かのご縁が深く繋がっていた」と思わずにはられないのです。

「美紗の会のつどい」の後、正式に入門の手続きをし、五月末までに四回のお稽古をさせて頂きました。まだまだ駆け出しで、右も左もよくわからない状況ですが、「美紗の会」での皆さまの唄や三味線がいかなる努力の賜物であるのかを実感しつつ、布衣先生の厳しくも温かいお稽古に接し、只々唄の持つ奥深い世界を知り始めている処です。そして時間に追われた日々を過ごしている自分にとって、師匠と向き合い、ゆったりとしたリズムにひたれるお稽古のひと時は、せわしない気持ちを落ち着かせ、少し立ち止まって自身を見つめる大切な時間にもなり始めているようです。

まだまだ入り口におりますが、少しでも精進し、

皆様の世界に近づき、この「縁」を大事にしながら「美紗の会」の一員として、自然に存在できるように、さらに稽古に励んでまいれる所存でございますので今後共どうぞ宜しくお願い申し上げます。

平成最後の「美紗の会のつどい」から、 令和最初のお稽古へ 己紗 俊咏

平成最後の美紗の会で歌った「露は尾花」は、個人的にとても難しい曲だった。今でもこの唄の意味がちゃんと解釈できないでいる。「寝たという」「寝ぬという」というキーフレーズが幾たびも繰り返される歌詞は、エロくもあり、流行りの言葉で言えばエモくもある。これはどういう情景を思い浮かべればいいのだろう。

小唄「梅川」、端唄「大津絵」は、どちらも近松浄瑠璃「冥途の飛脚」の世界観を元にしている。「三十三間堂」は「三十三間堂棟木由来」、「おぼる夜」は河竹黙阿弥の「十六夜清心」、「信濃屋」は「桂川連理柵」。唄も糸も、元の物語の景色に思いを馳せれば、間違った解釈かもしれないけれどそれなりに答えが出てくるかな、と思っていた。

浄瑠璃や歌舞伎が元になつていなくても、その風景がはつきりと浮かび上がってくる歌もある。今回、糸方を務めさせていただいた「やらずの雨」は、遠くに聞こえる雷鳴から、急激な気温の低下とともにポツポツと雨粒が落ち始め、それがやがて本格的な夕立となり壮絶な雨脚の早さとなり・・・やがてその雨も遠ざかっていく、そんな情景を想像しながらクドいくらいに緩急と音の強弱をつけて弾いた。

「おぼる夜に」を弾いたのは二年前の薊の会で。この曲の終奏の佃は、清心と十六夜がともに稲瀬川に身を投げ心中を図る場面。川の流れは早さを増しな



がら二人を流していくものの清心は死にきれず、十六夜は俳諧師白蓮に助けられる。そんな光景を思い浮かべながら、これも緩急をしつかりとつけた。どちらも、わかりやすいというわけではないけど、想像はしやすかった。

ところが、「露は尾花」ときたら・・・

昨年暮れの美紗の会の忘年会で、後濱さんから言われたことがずっと心に残っている。「福岡さんは三味線はいいのに、歌は自信ない感じがする」。ずっと感じていたことをずばりと指摘された。この方は、本当に他の方の唄をよく聞いてらっしゃるなあ、と思った。誰かのために弾くのは得意なのだけど(上手く弾くとは言ってません)、自分が歌うのは苦手な



のだ。唄の世界が自分の中で消化しきれないというか、自分のものとして歌えないというか、どこか他人事を歌っているような、そんな感じになってしまふ。唯一それなりに歌えたと思えるのは「三十三間堂」。このときは認知症が進み、四肢も十分動かせず声を出すこともできなくなった亡き母のことを想って歌った。

縁の宴の円

小野原 教子

手探りをしながら稽古を重ねたのに、最後の最後まで手探りだった。結果、迷ったまま本番に臨んでしまった。紫詠さんが苦勞して合わせてくれたのに：と本当に申し訳ない気持ちでいっぱいだった。四月になって新しい課題曲を師匠から言い渡された。また、苦手な世界（笑）。師匠、ホントよくわかってるなあと改めて感心するとともに、DS：いや、何でもありません。

四世竹本越路太夫は、引退後、義太夫語りの修行には二生必要だと語っていたそう。一生ではたどりつかない、と。そんな大層な高みを目指しているわけではないけど、令和となった今年、気持ちも新しくしてもう少し頑張ってみようと思えます。

二〇一九年四月二十日、京都河原町三条は京町家の屋根裏の一室「弱法師（よろぼし）」にて、「月下驚嘆抄秘會（げつかおうえんしょうひくわい）」と題された、西松布詠師匠のコンサートが開催された。

布詠師匠よりお誘いを頂いたのは、修理に出していたお三味線が丁度帰ってきた時だった。年末に久しぶりに弾きたくなって、六甲山系をのぞむ北向きの部屋の隅から取り出すと、皮が派手に破けていて情けないやら悲しいやら、初めての体験に半べそをかき、師匠にご相談していた。

弾くこともそうだったが、聴くこともずいぶんのご無沙汰である。招待状には、少数者の自覚ある方のみ、十名限定、仕出し弁当とお酒附とあり、アイトワークは魅惑的で不思議な雰囲気を感じ出している。行かない理由は見当らず、二つ返事で出席のお返事をしていった。



神戸から特急電車で一時間、当日は早めに家を出た。師匠はまだ会場におられず、名を名乗ると、「小野原さん！」と、声を掛けてくださる方あり。以前大阪で「ロウ」（デヴィッド・ボウイの同名アルバムより）という古本屋を経営していた女性で、驚きと喜びの再会は十五年ぶりくらいだろうか。

準備のお邪魔をするのは憚られて、趣のある小さな階段をふたたび降りる。喫茶店にでも行こうか。到着して思い出したが、そこは何度か訪れたことのある場所だった。限定特装本の美しい詩集を発行していた湯川書房が入居していた古い建物で、店主が亡くなった跡には、感じのよい青年が営む、清潔でミニマルな珈琲店があったはず。

二十代から三十代にかけて住んでいた頃は苦手

だった古都も、いったん離れば、しみじみとその良さを感じられる。限られた滞在時間のせい、風情を理解できる年齢に追いついたからか。ふと何もなく空いた時間ができると京都に居ることがうれしくなり、咽の渴きを忘れた。すぐ通りを渡った先にある中古レコード屋へ吸い込まれて、探していた盤がなかったのでもそのまま寺町へ上り、さらに二軒のレコード屋を廻った。



さて、久方ぶりのわたしのお師匠様との再会。敏腕マネージャーで着付け師でもある加藤さんにもずいぶんお会いしてなかった。着物姿のお二人はお江戸からいかにも華やかな上落。聴かれるお声だけでうれしい。同じ空気を吸えるだけでうれしい。わたしはすぐに気持が高揚した。

妖艶な香り漂う旧き佳き物に囲まれた「骨董古書かふえ」。店の主で本会の主催者武田好史さんは、演奏前に色々なお話をされた。映画、歴史、文芸、宗教、思想・・・わたしはついていくのに精一杯で緊張。関東大震災後阪神間に移住した谷崎潤一郎の小説の話が出て、やっと面白いとおもえる余裕がでたところで、仄明るい光のなか、春の鳥の美しい唄、はじまりはじまり。

土曜日の三時の開演は少し遅れた。日はすでに長くなっていったが、店内は心地よい薄暗さで、わたしたちは幽閉されたようでもあった。師匠の一声で、たちまち時空を超えていく。一曲目は端唄「夕暮れ」。東と西を唄で行き来していた頃、在原業平の東下りと都の郷愁。何度この曲を家で繰り返し聴いたことだろう。延びつつ響く高さは歯切れよく。以前岐阜でお稽古をつけて頂いていた頃の練習曲の一つ。前奏は長めで初めて聴くしみじみと情緒が伝わるアレソレ。師匠は鼻風邪をひいておられるとのことだったが、わたしには清々しい青空の驚きそのものだった。

今回のコンサートの隠れたテーマは東と西の交流で、それは双方向的で動態的で艶やかなもの。観客も半分以上は東京から来られていた。師匠の美しきお声と小気味良いお三味線はもろろのこと、演奏の合間のお話にも耳が引き込まれる。続く端唄は「嘘とまこと」。江戸の遊女の世界は「苦界（くがい）」と呼ばれ、遊女は「川竹」とも呼ばれる。沈まないように、川をたゆたう笹に喩えた女のこころを、どうかわかってください。そして小唄「一日を」「止めてはみたが」。心浮く恋の旅路、だまされされて女の運命、男の未練、断ち切りがたきは人の情。

わたしはその音楽家の糸と唄の前では、いつでも素直な聴衆のひとりに戻られる。毎回新しく体験する出来事のように、幾重にも塗りこめられ重厚な輝きを放つ器のよう。魔法のようなその音楽は、指や唇の先から、正しく管を通って織りなす呼吸、宙に華やいだ弧を描き、細やかなこころへ、還って行く。

今年の京都の桜の咲き乱れるは狂気か幻想かとは、武田さん。有名な円山公園のしだれ桜を、師匠は朧月夜に満開で楽しまれたようだ。しばらく春の桜を歌った小唄が続く。「夜桜や」に酔い、浮いた心よ「春風さんや」、どんなことがあってもこの木に着いて行く、女の覚悟は「この先に」で演じられる。めくるめく絵巻物を見ているよう、物語は男と女の世界から敷衍して、人のいのちの儚さは縁とその妙で彩られる。

一途な男心が珍しく歌われているという端唄「有明」。丈の低い行灯に仄かな明かりの菜種油。女は菜の花、男は蝶に喩えよう。東男が一人の芸者に命を掛ける。息をのむような演奏が続く、駒を替えるタイミングで、小ブレイク。また西に戻ってきて上方唄「御所のお庭」は、上方の端唄で地唄舞の短いもの。京都御所の春を告げるお雛様、雪が散らつく春もある。

最後十曲目は富本「反魂香（はんごんこう）」。富本とは、清元や常磐津とならび豊後節から分かれた浄瑠璃物で、いまでは唄う人がほとんどいないと師匠は語られた。美も知もおもうままだった老女檜垣の物語。いまや世を忍ぶ姿でも「むばたまの我が黒髪は白河のみづはくむまでなりにけるかな」と詠む。永遠なる物はない、すべて形あるものは滅びる。体は老いさらばえても、魂は恋しい人のところへ行きたい。布唄師匠の言葉もこころに染入るが、ラストのこの演奏には圧倒された。低く低く地に落ちて行くように鳴る音、師匠の華奢な御身すべてが楽器になって、いまここにうねるように轟きわたった。欧州のミュージシャンに聴かせてみたい、とおもった。



ブルースのようなプログレのような、説明すればするほど野暮ったくなるが、東洋／西洋を一瞬で、海を越えうる音楽。

来場者は「数寄者」と呼ばれるべく方々で、素敵な「おとな」の男女然としていた。松岡正剛さんを通じた店主との縁のある方々をはじめ、東京都庭園美術館での「ユニアンスの会」でお知り合いになっていた方と再会できたり、京都在住でも東京をよく知る方、大阪出身のわたしも愛している文楽に詳しい浪花の方、放送局を主宰されて当日の模様を撮影しに東京から来られている方もおられた。

さて、師匠のコンサートは終了し、美しい仕出し弁当が行き渡り、モエ・シャンドンのマグナムボトルが開いて、乾杯。わたしの詩で布咏師匠が作曲し

てくださった創作「アユタヤの蜻蛉」の出番だ。宴が再び開始となる合図のような、アンコール曲。まず僭越ながら朗読させて頂き、師匠が演奏された。わたしはこの大好きな音楽家のすぐそば、こんなに近くにいる。いいのかな。大丈夫かな。胸の高まりは酔いのまわりが早くなるシャンパンの泡とともに。いつまでもいつまでも。終わらないで。どうにも帰りたくなかった。

追記ーレコード屋で探索中に購入を諦めたものが、なんと「弱法師」の棚に見つかった。すでに宴はたけなわ、緊張も解け、おおらかでユニークな店主のお人柄に甘えて、お借りすることになった。お返しにあがるご縁をたのしみに。

《今後の予定》

◎九月七日(土)

午後三時より

軽井沢 鶴間邸

己紗の聲のつどい

◎十月十九日(土)

午後二時開演

神田明神文化交流館地下一階ホール

花柳千壽文・千壽文会門弟

花柳千壽文・千壽文会門弟

地方 西松布咏・美紗の会

特別出演 花柳典幸

賛助出演 花柳錦吾・桂小すみ

◎十一月十六日(土)

十二時半より

第五十八回 美紗の会のつどい

美紗の会一門の演奏と親睦会

■たより第89号

発行者 美紗の会

編集責任者 照沼太佳子

デザイン 近藤幹則

■美紗の会

主宰 西松布咏

稽古場 港区白金台三ー二ー二

白金台プレイス三階

電話 (三三四一)ー七二六

(五四四七)ー四二二

E-mail : nfue@soleil.ocn.ne.jp

URL: <http://www.misanokai.com/>

